



平成 28 年度カブトガニ幼生生息調査等の概要

1 はじめに

カブトガニは、約 2 億年前からほとんど形を変えておらず、「生きている化石」と呼ばれ、生物学的にも貴重な生物である。しかし、沿岸の埋立て等による生育場・産卵場の消失、水質汚濁等の様々な要因により絶滅の危機に瀕しており、環境省レッドデータリストの絶滅危惧 I 類に指定されている。山口県内においては、かつては広い範囲で生息していたが、現在では山口湾、平生湾及び千鳥浜の 3 沿岸域でしか確認されていない。

2004 年 8 月に設立した「榎野川河口域・干潟自然再生協議会」では、カブトガニワーキンググループ（グループリーダー：山口カブトガニ研究懇話会 原田直宏代表）が中心となり、山口湾のカブトガニ生育場等の保全を目的とした取組を進めている。

本稿では、平成 18 年度から地域住民や教育機関等の協力により実施している「カブトガニ幼生生息調査」について、平成 28 年度の調査結果を報告する。

2 調査方法

(1) 調査場所

山口湾（秋穂二島）において砂泥質で生息数が多い長浜、南潟を調査した（図 1）。

(2) 調査手法

ベルトランセクト法により実施した。あらかじめ設定しておいたセンサスルート（調査ライン）上を 2～3 人で歩き、1 ライン当たり 2m 幅に出現したカブトガニ幼生について、①個体数、②前体幅（図 2）、③発見地点、④発見地点の水深を記録した。

長浜では 16m 間隔で 20 ライン、南潟では 60 m 間隔で 5 ラインを設定した。

(3) 調査日時

干潮 2 時間前から実施した。

長浜調査：平成 28 年 8 月 20 日 13:25～16:00（中潮、最干 16:01）

南潟調査：平成 28 年 9 月 1 日 13:10～16:00（大潮、最干 14:47）

(4) 調査人数

長浜調査：48 人（20 組）

南潟調査：14 人（5 組）



図 1 カブトガニ幼生生息調査場所



図 2 カブトガニ幼生の前体幅の計測

3 調査結果

(1) 確認個体数

長浜で 876 個体、南潟で 341 個体を確認した (図 3)。

平成 18 年度から平成 22 年度までは徐々に減少していたが、平成 23 年度から増加傾向にある。平成 28 年度は、昨年度に比べて減少したが、どちらの調査区においても過去 11 年間の調査で、4 番目に多い個体数であった。



図3 カプトガニ幼生の確認個体数

(2) 推定個体密度

確認数及び調査範囲から試算した 1 ヘクタール当たりの推定個体密度は、長浜 215 個体/ha、南潟 338/ha であった (図 4)。

平成 24 年度以降、南潟の個体密度が長浜よりも多くなっており、干潟底質の変化等の影響が示唆されるが、明確な理由は明らかとなっていない。



図4 カプトガニ幼生の推定個体密度

(3) 齢数の構成

前体幅から幼生の齢数を推定した。平成 18 年度には約 7 割が 7 齢で構成されていたが、平成 28 年度には他の齢数の割合が増加し、齢数の多様化がみられている (図 5)。

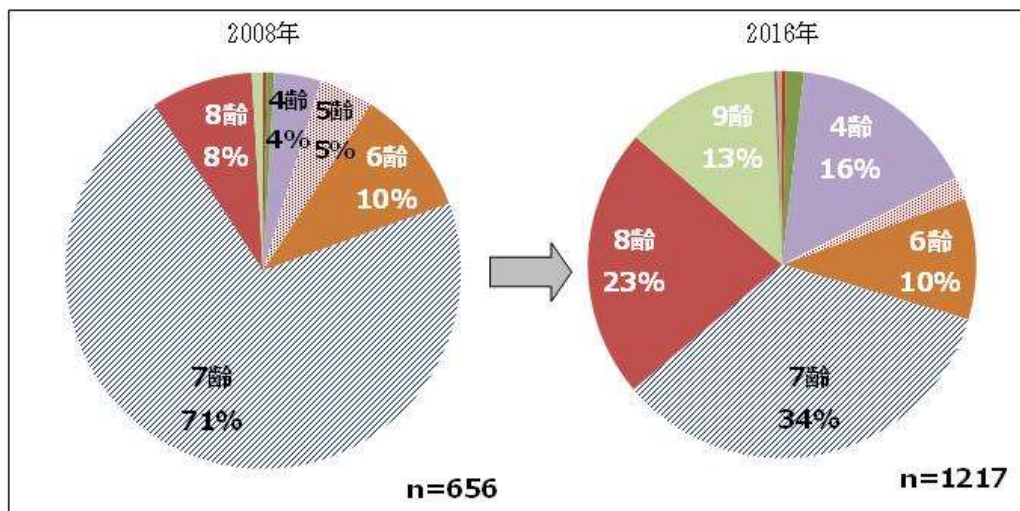


図5 カプトガニ幼生の齢数の構成

4 啓発活動

(1) カブトガニ観察会

長浜調査と併せて、小学生と保護者を対象にしたカブトガニ観察会を開催した。
参加者は、計 22 人（うち子どもが 11 人）だった。

(2) 報道

KR Y山口放送（8/20 テレビ放映）、宇部日報社（8/22 新聞掲載）から取材を受け、調査等の様子が紹介された。

5 今後の課題等

- ・調査者によってカブトガニを発見する技術に差があり、結果に影響していることが示唆される。このため、ボランティアから継続的な参加を得るなど、調査精度の向上に向けた対策が必要である。
- ・カブトガニの生息状況等をより詳細に収集するためには、本調査以外に産卵状況等の確認が重要である。現在、山口カブトガニ研究懇話会により調査されており、今後、積極的な支援を検討していく必要がある。

6 おわりに

山口湾のように、ボランティア等の多くの協力を得て大規模な生息状況調査を実施している地域は無く、貴重なデータを収集できる本調査は、絶滅の危機に瀕しているカブトガニを守るための重要な活動である。今後も調査を継続するとともに、地域住民等に対するカブトガニ保護の啓発に努めていきたい。